名古屋女子大学　紀要　40（人・社）　107～112　1994

ブルクミュラー25の練習曲について（第一報）

伊藤充子

Burgmüller's 25 Etudes

Mitsuko ITOU

緒　　言

ピアノ学習者の多くが、必ずといってよいほど習得する初心者用教材の１つに、ブルクミュラー25の練習曲がある。ブルクミュラー25の練習曲は、バイエル教則本と共に、古くから用いられている教材の１つである。現在では、バイエル、ブルクミュラーに変わって、新しく独特なメソードを持つ、数多くの教材が、どんどん出版され、学習用教材として用いられている。新しい教材が出てきている中でも、ブルクミュラー25の練習曲が、現在に至るまでずっと指導に用いられてきたのはなぜか。その教材的価値を問い直してみることにした。最近、初版を元にして編集されたウィーン原典版（1990年版）が、出版された。そこには、校訂者による「学習者のための助言」が、多くの紙面を占め、標題・スラーとアーティキュレーション・指使い・テンポの項に、多くの興味深い注意事項が書かれている。そこで、この原典版と今までに日本で多く出版されている版とを、標題、テンポ、スラーについて比較し、さらに、楽曲分析を行ない、１曲ずつ考察することにした。

作曲者について

ヨハン・フリードリヒ・ブルクミュラー（Johann Friedrich Burgmüller）は、1806年12月４日、ドイツのレーゲンスブルクに生まれ、1874年２月13日、パリ郊外のボリューで亡くなっている。上記のようにドイツで生まれたが、1842年フランスに帰化した作曲家であり、ピアノ教師、ピアノ奏者でもあった。父、ヨハン・アウグスト・フランツ（Johann August Franz 1766～1824）は、デュッセルドルフ市の初代の音楽監督、又、低地ライン音楽祭の創始者ならびに指揮者のひとりとして、この地方では名の知られた音楽家であった。弟、アウグスト・ヨーゼフ・ノルベルト（Norbert Brugmüller 1810～1836）は、将来を嘱望された作曲家であったが、病弱であったため、苦くして世を去っている。ノルベルトは26年の生涯のうちで、多くの作品を残しているが、それらは、メンデルスゾーン（Felix Mendelssohn 1809～1847）や、シューマン（Robert Schumann 1810～1856）から、高く評価を受けていた。フリードリヒ・ブルクミュラーも、このような家庭環境から幼少より作曲やピアノ教育をうけていたと推定できる。1829年当時、カッセルの宮廷楽長であり、著名なヴァイオリニスト兼作曲家であったルイ・シュポーア（Louis Spohr 1784～1859）に作曲を師事し、1830年、自作のピアノ協奏曲で楽壇にデビューした。1832年、パリに出て、主にピアノ教育に従事し、数多くの教育作品を作曲する。今日でも、世

界および日本の諸版で普及している教育作品には、＜25の練習曲＞Op.100，＜12の練習曲＞Op.105，＜18の練習曲＞Op.109があり、その他にも数曲が知られている。

25の練習曲について

この25の練習曲の初版の表紙には、次のように書かれている。

25/Etudes/faciles et progressives/pour/le Piano/composées et doigtées expressément pour Pétendue/des petites mains/par/Fred.ic Burgmüller/op.100

訳は次のようになる。

「フレデリック・ブルクミュラーの作品による小さな手のために構成され、はっきりと運指法が記入されたピアノのためのやさしく漸新的な25の練習曲　作品100」

多くの学習者が使用している版は、全音楽譜出版社：ブルクミュラー25の練習曲、音楽之友社：ブルクミュラー25のやさしい練習曲、が主なものであると思われるが、その他にも、次にあげる出版社から出版されている。カワイ楽譜出版社：ブルクミュラー25の練習曲、ドレミ楽譜出版社：ブルクミュラー25の練習曲、東京音楽社：ブルクミュラー25の練習曲、そして、ウィーン原典版：ブルクミュラー25の練習曲である。日本版の元になったと思われるペータース版は、Burgmüller 25 EASY AND PROGRESSIVE STUDIES, Opus 100のように書かれている。前出した6種類のテキストについて、各出版社により、異なっている点（標題・速度）について表にしてみた。

• 標題について

初版には、25曲ともすべてフランス語で標題が付けられているが、それぞれの版によって、英訳、独訳、和訳とも多少の違いが見られた。表には、原語と和訳のみのせた。

表1　標　　題

原　語	ウィーン原典版（＋原語、独語、英語）	音楽之友社（＋原語、独語、英語）	全音楽譜出版社（＋原語）	カワイ出版（＋原語）	ドレミ出版社（＋原語）	東京音楽社
1．La candeur	素直な心	正直	素直な心	すなおな心	あどけなさ	素直な心
2．Arabesque	アラベスク	アラベスク	アラベスク	アラベスク	アラベスク	アラベスク
3．Pastorale	牧歌	牧歌	牧歌	パストラール	牧歌	牧歌
4．Petite reunion	小さな集まり	子供たちの集い	子供の集会	子どものパーティ	子どものパーティ	子供の集会
5．Innocence	無邪気	無邪気	無邪気	むじゃき	無邪気	無邪気
6．Progres	進歩	前進	進歩	前進	前進	進歩
7．Courant limpide	清い流れ	きれいな流れ	清い流れ	静かな小川の流れ	清いながれ	清い流れ
8．La gracieuse	優美	優美	優美	優美	優美	優美
9．La chasse	狩	狩	狩猟	狩り	狩	狩
10．Tendre fleur	やさしい花	やさしい花	やさしい花	やさしい花	やさしい花	やさしい花
11．La bergeronnette	せきれい	せきれい	せきれい	せきれい	せきれい	せきれい
12．Adieu	別れ	別れ	さようなら	別れ	お別れ	別れ
13．Consolation	なぐさめ	なぐさめ	なぐさめ	なぐさめ	なぐさめ	なぐさめ
14．La styrienne	シャタイヤーのおどり	スティリアンヌ	スティリアの女	シュタイヤ地方のおどり〈アルプスのおどり〉	スチリア舞曲	スティリアの踊り
15．Ballade	バラード	バラード	バラード	バラード	バラード	バラード
16．Douce plainte	ひそかな嘆き	あまいなげき	小さな嘆き	かわいいなげき	甘えた嘆き	甘いなげき
17．Babillarde	おしゃべり	おしゃべり	おしゃべり	おしゃべりな人	小鳥のおしゃべり	おしゃべり
18．Inquietude	気がかり	不安	心配	不安	不安	心配
19．Ave Maria	アヴェ・マリア	アヴェ・マリア	アベマリア	アベ・マリア	アベ・マリア	アヴェマリア
20．Tarentelle	タランテラ	タランテラ	タランテラ	タランテラ	タランテラ舞曲	タランテラ舞曲
21．Harmonie des anges	天使の音楽	天使の声	天使の声	天使たちの歌声	天使のしらべ	天使のハーモニー
22．Barcarolle	舟歌	舟歌	舟歌	舟歌	舟歌	舟歌
23．Retour	再会	家路	帰途(かえりみち)	家に帰って	家路	帰り道
24．L'hirondelle	つばめ	つばめ	つばめ	つばめ	つばめ	つばめ
25．La chevaleresque	乗馬	令嬢の乗馬	貴婦人の乗馬	お嬢様の乗馬	乗馬ごっこ	貴婦人の乗馬

• 速度について

各曲の初めに付けられているイタリア語の速度記号、そしてメトロノームの速さは、初版に印刷されているものであるが、カワイ出版社とウィーン原典版（校訂者による適切なテンポ）には、若干、初版の速さより遅いテンポが記されている。

• 調の構成について

25曲は、ハ長調　8曲、ト長調　5曲、ヘ長調　3曲、イ短調　2曲、ホ短調、ニ短調、ニ長調、ト短調、イ長調、変ホ長調、変イ長調　各1曲ずつとなっている。同じ調は続くことがなく、調号の少ない調性で作曲されている。♯は3つまで（イ長調）、♭は4つまで（変イ長調）の調が使われている。又、第14曲は、G：→C：→G：と下属調へ、第15曲は、c：→C：→c：と同主調に、第20曲も同じくd：→D：→d：と同主調に、第25曲は、C：→F：→C：と下属調というように曲の途中で調号が変わり、はっきりと転調していることがわかる。

• 拍子について

4分の4拍子11曲、4分の3拍子は4曲、4分の2拍子は3曲、8分の6拍子は5曲、8分の3拍子は2曲である。4/4が全曲の半分をしめているが、パストラーレ、タランテラ、バルカローレといった6/8の舞曲も取り入れられており、幅広い拍子感を養うようになっている。

表2　調・拍子・速度

原　語	調	拍子	速度 (Wiener Urtext Edition) (Edition Peters・音楽之友社・全音・ドレミ・東京音楽社)	カワイ出版	原典版・校訂者
1. La candeur	C：	C	Allegro moderato ♩=152	♩=138～152	♩=138
2. Arabesque	a：	2/4	Allegro scherzando ♩=152		♩=132
3. Pastorale	G：	6/8	Andantino ♩.=66		♩.=56
4. Petite reunion	C：	C	Allegro non troppo ♩=152		♩=126
5. Innocence	F：	3/4	Moderato ♩=112		♩=100
6. Progres	C：	C	Allegro ♩=132		♩=120
7. Courant limpide	G：	C	Allegro vivace ♩=176	♩=160～176	♩=138
8. La gracieuse	F：	3/4	Moderato ♩=100		♩=88
9. La chasse	C：	6/8	Allegro vivace ♩.=132	♩.=104～132	♩.=108
10. Tendre fleur	D：	C	Moderato ♩=152		♩=120
11. La bergeronnette	C：	2/4	Allegretto ♩=138	♩=126～138	♩=126
12. Adieu	a：	C	Allegro molto agitato ♩=184		♩=126
13. Consolation	C：	C	Allegro miderato ♩=152		♩=138
14. La styrienne	G：	3/4	Mouvement de vasle ♩=176		♩=160
15. Ballade	C：	3/8	Allegro con brio ♩.=104		♩.=72
16. Douce plainte	g：	C	Allegrro moderato ♩=126	♩=120～126	♩=90
17. Babillarde	F：	3/8	Allegretto ♩.=72		♩.=63
18. Inquietude	e：	2/4	Allegro agitato ♩=138		♩=106
19. Ave Maria	A：	3/4	Andantino ♩=100		♩=84
20. Tarentelle	d：	6/8	Allegro vivo ♩.=160	♩.=144～160	♩.=132
21. Harmonie des anges	G：	C	Allegro moderato ♩=152	♩=138～152	♩=120
22. Barcarolle	As：	6/8	Andantino guasi Allegretto ♩.=72		♩.=66
23. Retour	Es：	6/8	Molto agitato guasi Presto ♩.=126	♩.=108～126	♩.=96
24. L'hirondelle	G：	C	Allegro non troppo ♩=138		♩=138
25. La chevaleresque	C：	C	Allegro marziale ♩=152		♩=138

• 形式について

二部形式は６曲、三部形式は18曲、そしてロンド形式が１曲である。また、前奏のついた曲は２曲、序奏のついた曲は10曲、後奏のついた曲は３曲、codaのついた曲は13曲ある。
詳しい形式の分析は、１曲ずつの楽曲分析時に示す。

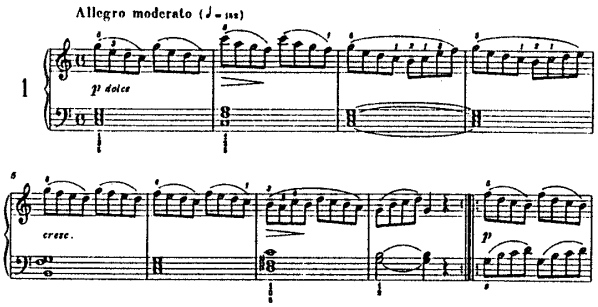
• スラーについて

ウィーン原典版と他の版とを比較した時、特に変更が見られる点は、スラーの付け方である。ウィーン原典版では、校訂者が「学習者のための助言」のなかで述べているように、初版に基づいたスラーが書かれている。スラーを１つのフレージングとして考えた時、ついスラーが切れているところで細かく切って弾いてしまいがちになる。しかし、スラーは18世紀以降弦楽器の演奏の指示記号として用いられたことを頭に入れて弾くならば、１～４小節（譜例１ａ）を、楽曲構成上の１つの固まりとしてとらえなければならない。19世紀中頃以後の楽譜編集者達は、スラーを音楽上のフレーズを表すための記号として書くようになった。（譜例１ｂ）このような経緯から、日本で多く出版されている楽譜は、長いスラーが書かれているものと思われる。スラーの意味を、改めて見直すよい機会であった。

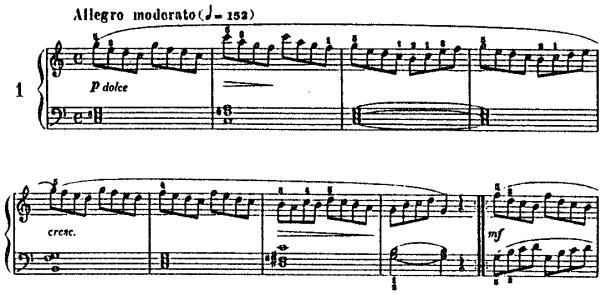
表３　形　　式

1	二部形式	A B coda
2	三部形式	前奏 A B A′ coda
3	三部形式	前奏 A B A′ coda
4	三部形式	序奏 A B A
5	二部形式	A B
6	三部形式	A B A
7	三部形式	A B A
8	三部形式	A B A
9	ロンド形式	序奏 A B A C A 後奏
10	三部形式	A B A
11	二部形式	序奏 A B coda
12	三部形式	序奏 A B A coda
13	二部形式	序奏 A B
14	三部形式	序奏 A B A
15	三部形式	序奏 A B A coda
16	二部形式	A B
17	三部形式	序奏 A B A 後奏
18	三部形式	A B A′ coda
19	三部形式	A B A′ coda
20	三部形式	序奏 A B A 後奏
21	三部形式	A B A coda
22	三部形式	序奏 A B A′ coda
23	三部形式	序奏 A B A coda
24	二部形式	A A B code
25	三部形式	A B A′ coda

譜例
１（a）
ウィーン原典版



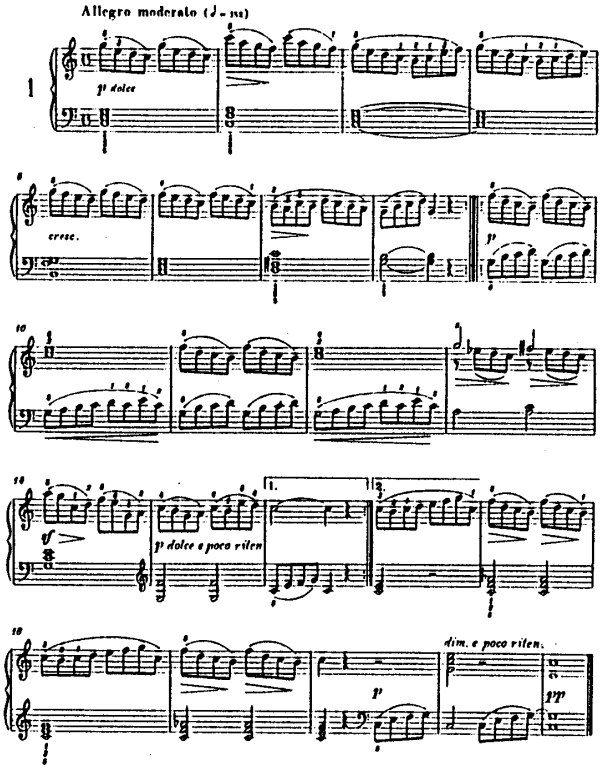
１（b）
全音版



第１曲 La candeur

ハ長調・4/4･A（１～８小節）＋B（９～16小節）＋coad（17～22小節）からなる二部形式・２つの８小節の部分（A・B）は反復される。（譜例２）
１～８小節の和音進行はハ長調Ⅰ－Ⅳ^2－Ⅰ－Ⅰ－Ⅴ$^1_7$－Ⅰ－$\frac{Ⅴ}{Ⅴ_7}$－Ⅴとなっている。第２小節のⅣは、Ⅰの和音のｅとｇが、それぞれe→f→e、g→a→gという刺繍音と見ることもできる。刺繍音と見た場合、１～４小節はずっとⅠ（トニカ）の安定した和音の上にメロディがのっているようにも見える。第６小節のハ長調のⅤは、ト長調のⅣでもある。続いて、第７小節のト長調のⅤに行き、第８小節のト長調（属調）への転調を示している。９～15小節の和音進行は、ハ長調Ⅴ$_7$－Ⅰ^2－Ⅴ$_7$－Ⅰ^2－$\frac{Ⅴ}{Ⅴ^2_9}$－Ⅰ^2－Ⅴ$_7$であるが、７小節を大きなフレーズとしてみると、この部分は、第16小節のⅠ（トニカ）に解決するための長いⅤ（ドミナント）であると考えられる。このように、１～８小節、９～15小節のそれぞれの８小節を、一つの流れとして弾かなければならない。codaである、17～22小節の和音も、第17、第19小節に減七の和音が出てくるが、最後までⅠの和音が続き、静かに終わる。和音の進行は以上のようであるが、全体に八分音符４つのフレーズから成り立っており、右手、左手とも、音の粒をそろえレガートで奏しなければならない。又、第13小節の右手の♪の保有音はきちんと押さえて、𝄾♩♩♩を弾き、第14小節のａの♪に向かってソプラノをg－fis－aと、よく響かせる。第22小節のdim. e poco rit.は、曲の持つ雰囲気を壊さないように付けなければならない。初心者が、練習曲ではなく、曲集として扱う教材の第１曲目としては、緊張感をもって弾くのに適した曲であると考える。

譜例２



結　　語

今回、原典版が出版されたことにより、150年にわたって、色々に手が加えられ、出版されてきた多くの版を見直すことができた。楽譜に忠実に弾くという、前提のもとに学習していくわけであるが、時代、出版社によって、解釈の仕方、演奏についてが規定されていく。1つの版にこだわるのではなく、原典版を中心に、多くの版を見、より広い視野で、楽譜を研究し、演奏しなければならない。

ブルクミュラー25の練習曲は、ピアノ導入者用教材（例えばバイエル教則本）を終了し、次の段階に進む者にとって、次のような3点において、親しみやすい教材の1つになっていると思われる。

1）各曲に標題がついている。2）小曲である。3）譜読みが比較的やさしい。

しかし、それぞれの曲の持つ音楽性を的確に把握し、楽譜を正確に読んで演奏をしないと、ただ単に音を並べているだけの演奏になりがちになる。このようなことを避け、楽しく弾くためには、ピアノの技術的向上と、音楽を理解する心が必要となる。

第2曲目以降、順次楽曲分析を行ない、より細かくこの曲集について研究し、音楽の全体的な把握に目を向けた指導を行ないたいと考える。

参 考 文 献

1）Wiener Urtext Edition Burgmüller 25 Etüden Op, 100　1990
2）新訂　標準音楽辞典　東京　：音楽之友社　1991
3）MUSICA NOVE 東京　：音楽之友社　1985　2月号
4）MUSICA NOVE 東京　：音楽之友社　1990　8月号